虹のかけ橋

第46号/令和4年9月

兵庫県立但馬やまびこの郷　https://www.t-yamabiko.asago.hyogo.jp/

「やまびこの郷」にビリヤード台があるということ

本年4月に着任しました所長の齊藤誠一（ニックネーム：てっちゃん）と申します。佐藤前所長を引き継ぎ、「やまびこの郷」をさらに発展させていきたいと思っています。3年前まで神戸市でスクールカウンセラーとして約20年勤務し、長く不登校と関わってきました。しかし、なぜこれほどまでに子どもたちが不登校に苦しまないとならないのか、なぜこんなにも子どもたちのために尽くしている保護者の方や先生方の努力が実らないのか、忸怩たる思いを持ってきました。

不登校のお子さん、保護者の方、先生方に「やまびこの郷」を勧めることもありましたが、なかなか理解してもらえないことも多く、なぜそんな遠くまで行って宿泊して、料理、製作、地域交流といった活動をすることに意味があるのか、ますます学校から離れてしまうのではないかといった疑問も聞かれました。しかし、その時は納得していただく回答はもてないでおりました。

「やまびこの郷」に来て気づいたことは、4泊5日の宿泊体験を終えて帰る時の子どもたちの笑顔です。それまで学校に行けない自分を責め、学校へ行ってほしいという周囲の期待に応えられず、ますます自己嫌悪を強めていた子どもたちが、それから解放されて、だれからも自分を否定されることなく自由に過ごせた証ではないでしょうか。やまびこタイムという自由時間には、大きな声を出し、笑って、ビリヤードや卓球に夢中になる子どもたちの姿を見ることができます。もう何年もこうした明るい様子を見たことがなかったという驚きを感じる保護者の方が大勢いらっしゃいます。

学校に行けないことにはいろいろな理由があります。どのような理由であっても、「学校へ行けない」という自分を否定し、周囲から否定されていると感じています。学校という場所に行けるようになるためには遠回りかもしれませんが、まずは本当の自分を取り戻し、自分を受け入れることが最初の一歩ではないでしょうか。「やまびこの郷」ではスタッフ一同がそうした子どもたちの一歩を応援したいと思っています。

宿泊を終えた子どもたちは、ビリヤードや卓球の腕を上げるだけでなく、今の自分にも自信を持って帰るはずです。

発達特性と不登校

県立尼崎総合医療センター　小児科医長　石原　剛広　先生

表題にあるように「発達特性と不登校との間に関係があるか」という問いがあれば、関係があると答えることができます。特に注目すべきところは「軽度の発達特性」についてです。発達特性が軽度であることで様々な問題が浮かび上がってきています。2016年から小児科の臨床診療の傍ら、医教連携をはじめとするアウトリーチを行ってきた知見をもとに、そのことについて順を追ってお話していきます。

(1) 軽度の発達特性とは何?

発達特性は、米国精神医学会が出版するDSM5の神経発達症群にある自閉スペクトラム症（ASD）と注意欠如･多動症（ADHD）と限局性学習症（SLD）をさします。併存例を含めて医療統計上は10%にも上るともいわれ、年々増加の一途をたどっています。軽度の発達特性は、診断基準を満たさない程度（グレーゾーン）の場合が多く、当然、健診や発達相談では見過ごされることが多いです。軽度の発達特性がある人は、当方の見立てでは20-30%の人に該当し、特にASD特性（またはADHDとの併存例）のある人は、特定の分野に強みをもち、医師や研究者、システムエンジニアなど特定のコミュニティ（専門職）に適応群として数多く存在しています。歴史を振り返れば、アインシュタインやベートヴェンなど、breakthroughやパラダイムシフトがおこるときには必ずといっていいほど発達特性のある開拓者が登場します。発達特性は偉大な発見や人類の進化に不可欠であるといっても過言ではありません。さきほどの医療統計の数字から、適応群は単純計算で人口の10-20%と概算できます。

(2) 発達特性が軽度であることの問題点

適応群で問題なく過ごしているかに見える軽度の発達特性がある人は、人生の節目におこるライフイベントでストレスにさらされることによって不適応（二次障害）に至るリスクを抱えています。例えば、職場の配置転換で出社できなくなるといった事例は、大人になって初めて発達特性を診断されることがあり、いわゆる「大人の発達障害」のケースになります。このような話は子どもたちにも同じように当てはまります。子どもたちは、体調不良や登校しぶり、不登校などをきっかけに病院を受診して発達特性と二次障害と診断されます。ただし、上で述べたように診断を見過ごされてしまい、二次的に症状としてあらわれる起立性調節障害や過敏性腸症候群、睡眠障害や最近ではゲーム障害といった診断のもと通院をするも、長年症状が改善しないケースが散見されます。

(3) なぜ二次障害になってしまうのか

適応群と不適応群との違いはどのように生まれてしまうのでしょうか。ひとことでいうと、個人因子と環境因子の掛け合わせによって決まります。個人因子は個人の気質（性格）、知能、身体条件、発達特性などであり、環境因子は家庭（生育歴）、地域、学校･園、時代背景、国･文化などで、それらの要素が組み合わさって二次障害に至ります。その因果関係はある意味ブラックボックスにはなっていますが、影響の大きな因子を中心に見立てていくと

背後にあるものが見えてくることがあります。それは、（ADHDの併存を含めて）ASD特性がある子どもとその環境因子を見立てることです。ASD特性の中核症状は①社会的コミュニケーション障害と②こだわり（マイルール、マイペース、マイワールド）のふたつです。さらに他のASD特性である、言葉のやりとりが苦手で過敏性を伴う場合は、さまざまなストレス（子どもの成長にとって不可欠なものが含まれます）にさらされる学校生活における不適応のリスクを高めます。

（4）学校での子どもたちのすがた

小学校3年生頃になると、発達特性のある子どもは、同年代の子どもたちとの行動、認知や感覚における「ずれ」が目立ってきます。昼休みや長い休憩時間でのクラスの子どもたちの様子を思い起こしてください。一方的に話しかけて本人だけ楽しそうにしている子。特定の仲良しがいるわけではなく各グループの間をふわふわと漂っている子。一人で黙々と本を読む子。職員室や図書室など決まった場所を転々と歩いて過ごす子。もしかしたら、特に問題ない姿と思われるかもしれません。これまで多くの学校で巡回相談をしてきましたが、学校の先生が「気になる子」と医療の私が「気になる子」との間に違いがあることをいつも痛感しています。必ずしも、学校で課題があると思われている子とASD特性による「ずれ」がすでに顕在化している子が一致しないのです。環境による違いはもちろんありますが、一般的にはASD特性の子は学年とともにどんどん理解者と仲間が減っていきます。絵やゲームが上手いなどの強みや特技があれば、周囲との「ずれ」は許容され、学校やクラスに適応できるチャンスがあります。また、個人差があるものの、年齢とともに自分が経験するパターンを理解していくことで「ずれ」を埋め合わせていき、数年遅れで段階的に環境に適応していくことができます。

（5）発達特性を理解することで

小学校や中学校という集団・社会に適応していくことが要求されるストレスのある環境（子どもの成長には必要です）において、ASD特性の子どもが成長を猶予してもらうことが重要で、支援者は発達特性のある子どもの特性を理解し関わっていく必要があります。ASD特性のある子どもたちは、「ずれ」による孤立が生じやすいので、ASD特性のある子どもたちを集めることができれば不適応のリスクをさげることができます。席替えや班分け、クラス替えのときにぜひ検討してみてください。ASDだけでなく発達特性のある子どもたちは、好奇心（内発的動機）で学ぶことができる尊敬すべき人たちです。人の指示ではなく、自分の心によって行動するので、学校や家でうまくいかないことがでてくるだけです。学校にいても、学校にいなくても、子どもたちの最も輝くところをみつめる支援者たちによる「虹のかけ橋」がいろんな場所にかかっているのを想像しながら書き上げました。

◆◆著者紹介（石原　剛広／いしはら　たけひろ）◆◆

1974年生まれ。関西学院高等部卒業。九州大学医学部医学科卒業。国家公務員共済組合連合会浜の町病院初期研修、兵庫県立柏原病院小児科専攻医、兵庫県立塚口病院小児科を経て、現在兵庫県立尼崎総合医療センター小児科医長として勤務。専門は一般小児と児童精神。2016年より積極的に発達特性支援に関するアウトリーチを推進してきた。尼崎市いくしあ（子どもの育ち支援センター）の立ち上げ時にアドバイザーとして関わり、公認心理師現任者講習講師（保健医療分野、教育分野）、宝塚市5歳児発達相談医、宝塚市教育委員会教育委員などを務め、2023年3月から開業する宝塚市子ども家庭室発達相談事業の相談医を担当する。また、2017年から発達特性事例検討会を主催し、毎回阪神間から100名前後の医療・教育・福祉・行政関係者が参加しており、発達特性支援の多機関連携の実践の場をつくっている。

ICT等を活用した不登校児童生徒への支援

一人1台の端末が整備され、ICT等を活用した児童生徒への支援について、各校で工夫されていることと思います。当所を利用している児童生徒からも「タブレットを使って、別室で学習した」「オンラインで授業を受けることができた」などの声を聞き、多様な学びにつながる可能性を感じています。また「対面は難しくても、オンラインでなら先生と話をすることができた」など、直接は出会うことができなくても、オンラインでのやりとりが、人と関わるきっかけになっているという声も聞かれます。

令和4年3月に県教育委員会が発行した「不登校児童生徒への多様な支援に向けて」では、以下のようなICTを活用した不登校児童生徒への支援例をあげています。

～ICTを活用した不登校児童生徒への支援例～

児童生徒の実態把握への活用	子どもの状態のデータ化・可視化 ・欠席状況、健康観察や生活アンケート、日々の記録（児童生徒自身による入力含む）等
教育相談を主とした支援	児童生徒との関係づくりや学習支援への準備段階としてのオンラインの実施 ・オンラインによる個別相談、アプリを使ったチャットによる交流　等
学習を主とした支援	学習アプリの活用やオンライン授業の実施 ・学習アプリの教材や学習動画、学校からの課題等を自宅や別室で取り組む ・校内の別室や教育支援センター、自宅とつなぐオンライン授業　等

（「不登校児童生徒への多様な支援に向けて」R4.3兵庫県教育委員会より）

対面でのコミュニケーションとあわせながら、ICT等を効果的に活用し、不登校児童生徒への支援の充実につなげていただければと思います。

但馬やまびこの郷もオンライン学習に取り組んでいます！

但馬やまびこの郷でも、昨年度からオンライン学習に取り組んでいます。昨年度は、中学生を対象としていましたが、今年度より、小学校5・6年生も対象にすることにしました。

当所では、教科学習による知識の習得だけではなく、アイスブレイクのような活動も積極的に取り入れ、子どもとの絆づくりに努めています。オンライン学習に取り組んだ子どもたちからは、「分からないところを気軽に質問できた」「自分の興味のある内容を学習することができた」という声を聞いています。また、保護者の方からは、「オンラインで楽しく学習でき、登校したり、定期テストを受けたりすることができました」という声をいただいています。

これからも当所では、子どもたちのニーズにあわせて、オンラインによる多様な学びの場を提供していきたいと考えています。

兵庫県立但馬やまびこの郷機関紙「虹のかけ橋」NO.46　●令和４年９月
●発行／兵庫県立但馬やまびこの郷
●〒669-5135　朝来市山東町森字向山3045-101　TEL(079)676-4724　FAX(079)676-4721
●URL　https://www.t-yamabiko.asago.hyogo.jp/

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。

04教Ⓣ２―001Ａ４